

## 「三世代平等長寿社会」

### 1 だれもが安心して暮らせる社会

改元の初年をつつがなく過ごしておえて、新たな年を迎えているみなさんのこの一年に期待して訴えます。とくに高齢期にいると自覚しているみなさんに。

こと改まって訴えるのは「三世代平等長寿社会」の創出についてです。ここで「三世代」というのは、「青少年世代（成長期）」・「中年世代（成熟期）」・「老年世代（円熟期）」を指しています。あいまいな言い方のようですが、だれもが自分が人生の三期のどこに属しているかは実感としてわかるもの。身近でわかりやすい例としては孫・子・自分の三代のそれでしょいか。長寿時代ですから立場によっては孫・子・自分・親という「四世代平等長寿社会」を想定する人もあって、このほうが問題意識がはっきりしていて、タイトルとしても刺激的かもしれません。

たとえば七〇歳の「古希」を迎える”ぶらさがり団塊”のAさん（一九五〇年・昭和二五年生まれ）は、敗戦の戦禍の残るさなかで自分を産み育ててくれた九四歳（一九二六年・昭和元年生まれ）の母が健在でおり、団塊ジュニアとともに就職氷河期をかくぐってきた四五歳の子ども（一九七五年・昭和五〇年生まれ）がおり、これから二一世紀を生きぬく二〇歳の孫（二〇〇〇年・平成一二年生まれ）がいるという四世代同居の一家です。「わたる世間・・・」ふうのドラマができそうな家族です。

とはいえ目下の主要な課題は「三世代平等長寿社会」の達成にあります。「三世代が平等である社会」が旗印であり、それを「長寿（高齢化）」の進行している時期に合わせて達成することによって、同時代とともに生きるだれもが安心して暮らせる生活環境を整えようというのが、この表題の趣意ということになります。

ですから現実には動いている「平等でない社会」、平等に向かっている社会」の存在が意識されています。この課題の解決の成果は次の世代にとっては社会資産になることがらです。学生など若いみんなも将来の自分たちのために関心を持ってほしいと思います。

\*\*\*\*\*

まずは「人生六五年」から「人生一〇〇（90+10）」

年」への意識の転回が求められます。少し視点をずらしていうと「二世代(20+40)+2」型から「三世代(30+40+20)+2」型への一気の転回です。数字は基準値ですからご自分の実情に合わせて足し引きすればいいでしょう。得心がいかなければ、放っておいてもいいでしょう。

はるか遠い一二五〇年前に五八歳で去世した唐の詩人杜甫が詠んだ「人生七十古来稀なり」(曲江)から七〇歳が「古希」と呼ばれて、長いあいだ賀寿のひとつとされてきました。が、いまやだれもが「古希」にたどり着くことができるようになった「長寿(高齢化)の時代」であることは、スーパーの売り場を眺めていても実証されます。課題はそれに見合ったさまざまな場のしくみの変容が追いついていないことにあるのです。「人生一〇〇年」の高齢化時代の暮らしに見合う「三世代社会」の欠如です。

## 2 モノづくりへの高齢者参加

令和(後平成)二年には、一九五〇(昭和二五)年生まれのみなさんが七〇歳の「古希」に、そして終戦の一九四五(昭和二〇)年生まれのみなさんが七五歳の「後期高齢者」に到達します。その間の団塊世代を含む戦後生まれの約一〇〇〇万人の高齢者が、稀れどころかみんな健丈で元気に暮らしています。日また一日をそれぞれの「自己実現」のために多様多彩な人生を送っている「平和団塊」のみなさんです。

本来なら、日々過ごしている地域の生活圏で、長年かけて培ってきて今もたいせつに保っている知識や技術や人脈や資産を活かして、高齢期の生活感性にふさわしい新たなモノ(サービスマ)を製品としてつくり、商品として流通させ、家庭にはいつて生活用品として利用しているはずでした。そういうモノの変容があつてはじめて高齢期のみんなの暮らしを豊かにすることができるからです。百均商品に囲まれた家庭内途上国化とは肌あいのちがった地産製品が息づく和風の家として。

焦土と化して何もなくなつてしまつた敗戦後の暮らしを想えば、遅れて豊かになろうとしている途上国産のやや粗雑な製品でも不満はいえないものの、「丈夫で長持ち」する品質の確かな地産・国産品に囲まれて、

夜戸を閉じずに「安眠」できた日々は、かけがえのない幸せな体験となっています。

その故あつて高齢者は敗戦後の社会を復興・発展させた功労者として、みんなの善意によって分け隔てなく“被扶養者”として温存されてきたのでした。貯金（自分のために蓄えずにゼロの先人もいます）と退職金（かなり比較差があります）と一〇〇年安心の年金（差別なし）の受給をあわせて、だれもが労苦しないですむ“余生”が約束されていると信じて暮らしているのです。ところが新世紀一九年にして、二〇〇〇万円もの生涯生活費の不足が財務省から漏れてきているのです。

\*\*\*\*\*

寝起きの不安を追い払うには発想の転回が必要です。「失われなかった二〇年」——高齢者が年々増えて「高年世代」が形成されたこの期間（高齢化率二五％に達したのは二〇一五年）に、高齢者となった人びとによって、みずからの生活感性にふさわしい新たなモノやサービスが各地域・各分野で創出できていけば、だれもが良質な国産・地産品に取りかこまれて過ごし、後人や外国人にうらやましがられて、生き活きとエイジング期を過ごすことができたいはずでした。

繰り返しは老齢の特性ですから何度もいいますが、新世紀に入ってから政治リーダーによる失政連鎖が原因の結果なのです。こう指摘してもご自分の責任だと思ふ政治家はほとんどいないでしょう。

そんな失政の犯人探しよりも有効なのは、高齢者の一人ひとりが、あたかも泉眼のようにこんこんと内発する発想の展開をたいせつにすること。

地域なら伝統や特性を探して活かして、企業なら高年社員と社友が協力して、既存の自社ブランドのノウハウを活かして新たな高年用の製品を発想・工夫して製品化すること。既存の青少年（成長期）用、中年者（一般）用に高年者（円熟期）用を加えて、“一品三種”（三世代＋女性対応があれば四種）の製品化を実現することにあります。

これまでは途上国型の若者や女性の「成長力」による“経済成長”でしたが、プラスして高齢者の「成熟力＋円熟力」による良質な国産・地産品による“経済伸長”（成長というたまぎらわしい）をどう展開する

かが、地域と企業の実情に合わせた急務となっているのです。「高齢者向けモノとサービスをつくる」ことは内需を安定させ拡大させて経済を持続可能にする重要なエンジンです。実現者はいうまでもなく、自立し参加しそれを自己実現しようとする一〇〇歳志向の高齢者のみなさんです。

### 3 国連の「高齢者五原則」が指針

みなさんは二〇年前の世紀末一九九九年には何歳で何をされていましたか。

そのとき国連は、二一世紀の潮流として平和をまもりつつ迎える「高齢化」を見通して、一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons)とし、一〇月一日を「国際高齢者デー」と定めて、高齢者が自立して「すべての世代のための社会をめざして」活動に参加するよう呼びかけたのでした。

国連の掲げた「高齢者のための五原則」は「自立 (independence)・参加 (participation)・ケア (care)・自己実現 (self-fulfillment)・尊厳 (dignity)」です。

当時わが国は「高齢化マラソン」の先行国グループのなかで、アジア唯一のそれも際立って進行の速いランナーとして注目されていました。国民の関心も広くあって、総務庁をフォーカルポイント(窓口機関)として対応して全国展開をしています。全国の自治体の関連事業は一〇八三件に及び、一〇月一日には東京都庁で記念式典が行われて、就任したての石原慎太郎都知事があいさつをしています。民間団体を結集した高連協は「高齢者憲章」を起草し、九月一五日に東京・大隈講堂で、堀田力代表が報告しています。以後の協会活動の指針となっています。

それから二〇年、「高齢化」では国際的にダントツで先行するわが国は、先進的な「高齢化対策」のモデル事例を期待されながら、「高齢社会対策」を自然渋滞させてきたのです。「高齢者対策」と違って世界に先例がないゆえに「高齢社会対策」は、わがこととして参加して体現する「高世代」が不在の時期には対策構想(「高齢社会対策大綱」、一九九六年)は準備してあったものの実質的な進展をみませんでした。国際的な指針としての「国連・高齢者五原則」のうち、実感できているのはわずかに「ケア」だけというのが実情な

のです。

#### 4 「社会の高齢化」へのチャンス

見出しとしてはいささか刺激的すぎるので控えましたが、「一〇〇〇兆円超の国の負債を負う」ことができるといえば、こんな豪快なことがいえる場合はほかには見出せないでしょう。

いまの政府の年度予算の立て方では何年かかっても負債を減らせるどころか増えるばかり。公的な負債を負ってこの国に生まれてくる子どもはかわいそう。子どもが生めない。その責任は若い人にはありません。働きざかり世代には解決方法がありません。ではだれに？

ここが発想の転回点です。

一九九九年の「国際高齢者年」からこのかた二〇〇〇年、「高齢化」の当事者である高齢者はどうしてきたのでしょうか。

一九六一年にスタートした「国民皆保険」、二〇〇〇年にスタートした「介護保険」の充実、そして最近では自治体ごとに「地域包括支援センター」が設けられて、住民が高齢期を安心して暮らせる体制が形づくられてきました。

周りを見てわかるように、大方の高齢者は身の丈いっぱいの貯金と、ほどほどの退職金と、一〇〇年安心の年金の受給を得て、労苦しないですむ“余生”を過ごしてきたのではないのでしょうか。繁栄の時代をこしらえてくれた先人（功労者）に対する後人の慰労の善意によって支えられて。こんな暮らしが生涯にわたって約束されていると信じて。それゆえに現役の時に培った知識も技術も活かすことなしに。これが問題であることに気づいても言い出せないで推移してきたのです。

活かせれば可能に思われた自力によるモノやサービスや居場所やしくみづくり。それに挑んで独自の特徴をもつそれらを成し遂げた少数の先駆者が各地にいます。成熟期・円熟期にある人びとが保持して暮らしている生活感性に、知識・技術・資産・人脈を活かして地域生活圏での日々新たな暮らし方を提供しみずからも実感できている少数の先達が各地にいます。

そういう自立した生き方が日本オリジナルの「高齢

化社会」を形成するプロセスの源泉なのです。一つひとつの泉眼なのです。内から湧き出る発想とその実現。それが見渡すかぎり水玉模様のように重なって広がって大地を覆いつくすとき、総体としての日本社会の「高齢化」が達成されることとなります。高齢化後進国が求めるモデル事例となり、クールジャパンのあらたな対象となり、後人のための資産となる優良な Made in Japan 製品の宝庫となり、「三世代平等長寿社会」のしくみの基盤となるはずのものでしたのです。

\*\*\*\*\*

二〇年間に活用されずに失ってしまった先人の知識と技術の総体は実に膨大なものとなっています。失った生命は二〇年のあいだに二三〇〇万人を越えます。わかりやすくいえば、失ってしまったかけがえのない先人の知識と技術は、この間の社会保障費を相殺し、国家の負債となっている一〇〇〇兆円超の過半の負担に堪えるほど膨大だったのです。

善意で始まったとはいえ、今までのような余生がいつまでも許されるほどに先人が蓄えてくれた国力に余裕があるわけではありません。その上に戦禍を知らない世代の政治リーダーは、先人がこしらえてくれた公的な基盤の上で、私的な仲間うちでサクラを見てバカさわぎをしたり、必要とあればお札を刷り増して遊び戯れに興じているのです。

何よりも「高年世代」が不在のままの社会対応を高齢化後進国に模倣させるわけにいかないので。日本の高齢者の「高齢世代」を意識したこれからの半歩一步の社会参加がそのまま国際的な期待に沿う成果に連なると確信して。恒例の「新年の会」などに集まった地域の仲間や会社の社友と、旧交をあたため持病をねぎらい終活や去世した人物の話をするだけでなく、「三世代平等長寿社会」へのあらたな活動を語りあうこと。高齢者が人口の四人にひとりに達してから始めるというのは、未萌の領域への道程を模索する先陣としてのわが国のいたしかたない選択事情なのであって、それはこの国での「三世代平等長寿社会」達成のモデル事例が可能なチャンスでもあるのです。

## 5 「高齢者対策」と「高齢社会対策」

高齢者であるみなさんは、「高齢化」に対する対策と

いうとき、何を思いますか。まずはご自分の人生にかかわる医療、介護、それから福祉とか年金とか・・。「高齢化」が世界一の速さで進んで、人口に占める「高齢化率」が二八%を超えたわが国で「高齢化対策」というとき、上記のような高齢者個人にかかわる「高齢者（ケア）対策」が中心になることは想定されるし、実感もあります。それとともにモノやサービスや居場所づくりや交通手段といった生活環境にかかわる「高齢社会（参加）対策」があるのです。

急増する高齢者を対象にした「高齢者（ケア）対策」のほうはこの二〇年、財政上の負担に苦慮しながらも年々充実させて、国際的レベルを保持してきました。これはだれもが身近に体験してきたところでは。

「高齢者（ケア）対策」だけでも国・自治体にとつては並大抵の事業ではなかつたのですが、加えて「高世代」の登場とともに「高齢社会（参加）対策」の課題が重なってきているのです。

\* \* \* \* \*

「高齢社会（参加）対策」は社会のしくみの変容にかかわりますから、自治体によって事情が異なりますが、それゆえに独自の対策が必要になります。

地域で増えつづける元気な高齢者のみなさんが参加しないでは「少子高齢化」の進行とともに地域活動は萎縮するばかり。人はいるのに人手不足になってしまいます。「高齢社会（参加）対策」によって、「労働力減少」ではなく「労働力変容」を成し遂げることができて持続可能な「高齢化経済」（エイジノミクス）の伸長が見込まれるのです。これは地域だけではなく企業でも同様の重要な課題です。

「高齢者（ケア）対策」と「高齢社会（参加）対策」は両翼です。この二〇年は片肺飛行がつづいているのです。その間、世情の逆風にさらされて、庶民は「逆風行舟」の状態にいるのです。

## 6 健陀多（カンダタ）の話

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』は大正7・1918年の作品ですから一世紀前のことになります。子ども向けの雑誌『赤い鳥』の創刊号に書いた童話で、お釈迦さまがおおいでになる極楽とその対極である地獄との間で、

一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多が主人公です。もちろん天上が極楽ですから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れていて、犍陀多はその糸にすがって極楽へとむかう途中にいます。

本人は覚えていないのですが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄であえいでいた犍陀多を救ってやろうというのです。上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で、犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってきます。

極楽へつながらるのは一筋の細い蜘蛛の糸。たくさんの人がぶらさがっては重さに耐えきれずに糸は切れてしまふ。悪党ですからとつさに自分の下で糸を切るのとくらい思いついたとしても不思議ではないのですが、作家は犍陀多にそんなことをさせるいとまを与えません。犍陀多は地獄に落ちていくことになりません。

じつは芥川のこの『蜘蛛の糸』の話には元ネタがあつて、鈴木大拙が訳したポール・ケーラス著『カルマ（因果の小車）』からモチーフを得ているのです。やはり仏陀に「この糸を便りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へとむかいます。が、同じように後から後から糸にすがって昇ってくる人びとに気づいて、「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて地獄へ落ちていきます。

「自分だけは」と願って地獄へ落ちていく犍陀多を見る大拙と龍之介とが感じていたところは同じではないでしょう。大拙が関心を持つのはひとりの凡夫としての犍陀多の心の動きであり、芥川が「極楽と地獄」という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、鋭敏な作家の眼前で広がりつつあった「格差」を表現したかったからにちがいないからです。

## 7 「平和と平等」から「軍事と格差」へ

『蜘蛛の糸』で芥川が表現するように、極楽は単調でつまらなそうに思えます。自分を理解してくれようという仲間はいなそうで。地獄から極楽までたどる途中で他に何か別の世界があるはずで、できることならそこで下からくる連中に糸をくれてやって塗中下車しても



いいと思った人もあることでしょう。

芥川はそののち「天災」である関東大震災（大正12・1923年）に遭遇して、東京下町のふるさとが焼尽する「地獄」をみ、「唯ぼんやりした不安」に襲われます。鋭敏な作家にのちの時代の「人禍Ⅱ地獄」となる「大東亜戦争」（日中戦争・太平洋戦争）がどこまで予見されていたかは知れませんが、「唯ぼんやりした不安」に襲われたまま昭和2・1927年1月に自死してしまいます。犍陀多の糸を切ったのです。将来に自分が生ききれない時代を予見していたことは確かです。そのあと引き起こされた「軍国主義」による「一億総動員」の戦争・・・。

いま「2011・3・11 東日本大震災」のあと、世にさまざまな「格差」が広がるなかで「軍事」が動く気配を感じて「不安」に襲われている多くの庶民。信頼するにはほど遠い政治指導者。大戦後70年余をすごしてまた「平和と平等」への指向から「軍事と格差」を容認する風潮が広がりつつある現実。衣装を替えて現れる国民の性向（悪癖）。

「自分だけはなんとか」と願いながら、極楽へゆくことができずに地獄に落ちていく現代の犍陀多。それでも自分の蜘蛛の糸がいちばん遅くに切れることに一縷の望みをつないで。

胸中にそれぞれの戦禍を収めて外界の「平和」を保った昭和人、「平和と軍事」という存在の多重性の間を行き来した平成人。そして胸中の「平和」を守るために外界に「軍隊」を要請する令和人。いま「平和から戦争へ」そして「平等から格差へ」と時代の振り子が戻ってゆく気配。

「100年人生」という長い高年期を得ても、将来への「不安」を抱えて過ごさねばならないというのは酷な話。そのなかで「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話。酷でもなく罪でもない穏当な人生を送るにはどうすればいいのか。

## 8 「三世代平等長寿社会」のすがた

まずは高齢者自身の「自立・参加意識」の醸成、これが基本中の基本です。内発的なものですから、ここで左右をいえませんが、有無によって日々の送り迎えに少しずつ較差（こうさ）が出るものと想定されます。

その上でさまざまな就労の延長や高齢起業による高齢社会にふさわしいモノやサービスづくり、地域の居場所・通い場所への出入りなどがあります。とくに自治体が独自性を横比べで競って独自のカリキュラムを構成して開設している生涯学習施設（生涯大学校・60歳以上の住民が対象）で学んで、地元で能力を活かせる活動の場を得るとともに生涯の学友を得ることになります。また「世代交代」して退くのではなく、同じエリアでエイジングを共にする高齢者と青少年として「世代交流」をすすめて、歴史や伝統や特産を引き継ぐ場とすること。介護やエンディングを含む地域での「支え合い（互助）」への参加、ユニバーサル・デザインの行き届いたまちづくり、安全な移動の確保・そのほか「高齢社会（参加）」づくりの課題は多々あります。

地域で増えつづける高齢期のみなさんは暮らしの中で、「これは」という自分の生活感性に見合ったモノやサービスを発想・発案したとき、そのままにせず製作が可能な企業や個人を探しあてて製作を要請すること。自分ひとりの暮らしを快適にすることが3500万人の高齢者の暮らしを快適にし、経済伸長に通じるのだと確信することです。そのため技術や知識や経験をもつ企業人や個人が必ず地域に存在していて、要望に応じて新たなモノやサービスを作り出す。「成熟＋円熟製品」(Older Person, s Goods OPG)の登場です。

やや高であっても安心で丈夫で長持ちする「成熟＋円熟」製品 (Older Person, s Goods OPG) が身のまわりに一つまたひとつと増えて暮らしを快適にする。20年余のあいだ、グローバル化で海外にしごとを奪われていた中小企業の高年熟練社員が待望していた出番がやってきているのです。

いまそういう国産回帰の方向に進んでいる業界はといえば、スポーツ・フィットネス、コンビニ、配食、介護ロボット、ヘルスケア、住宅・不動産、自動車、食品・外食、家具、電気製品、ペット、衣料、百貨店、旅行・・・など。

高齢者の暮らしのさまざまな場面に快適さをもたらす「シニア向け・製品」が次々に増えていきます。肌で感じられるほどに「人生一〇〇年」のための丈夫

で長持ちする「優良な国産品・地産品」が身のまわり  
に存在感を示すとき、成熟力＋円熟力による「日本高  
齢化経済社会」の成立を示す総体の姿が見えてきます。  
そうしてはじめてアジア地域の「グローバル化」の  
ために「足踏み」をして待っていたわが国の各地各界  
の中小企業が動き出し、優良新製品の開発に挑む体勢  
を整えることになりました。引退した社友も参画して、  
成員みんなが愛着をもって新たな「一品三種」の自社  
ブランド製品をつくって世に送り出す。細かですがた  
しかな内需による持続可能な「一億総活躍」の経済社  
会を創出する展開となるのです。これからの20年、  
世界最速で高齢化率25%（人口の4人にひとり）に  
達したあとも高齢者が増えつづける日本。わが国の高  
齢者は新しく「高年世代」を成立させて、地域でも企  
業でも、「青少年」、「中年世代」とともに「社会の高齢  
化」（成熟化・円熟化）をすすめることになります。  
前人未到の「三世代平等長寿社会」をめざして、参  
加して事故実現を果たして、敬愛され尊厳をかちとつ  
て生涯を終わること。一人一つの国際的モデル事例を  
体現せねばならないのです。止め